



TITLE:

# 北朝における貴族制度(上)

AUTHOR(S):

宮川, 尚志

---

CITATION:

宮川, 尚志. 北朝における貴族制度(上). 東洋史研究 1943, 8(4): 209-228

ISSUE DATE:

1943-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145801>

RIGHT:

# 東洋史研究

第八卷  
第四號

昭和十八年十一月發行

## 北朝における貴族制度 (上)

宮 角 尙 志

内容 一、はしがき 二、五胡治下の漢族郡望 三、北魏朝廷と漢人貴族(以上本號) 四、代人貴族の地位 五、北朝に於ける寒門・寒人 六、北朝後期の政局と貴族・寒門 七、結 語

### 一 は し が き

本論文は別に發表すべき「魏晉及南朝の寒門・寒人」<sup>①</sup>において六朝貴族制の側面を考察せんとした試みに引き續き、北朝における貴族制の實情と特質とを明かにせんとするものである。たゞ寒門・寒人を主題としなかつたのは、北朝では北族と漢族貴族制の關聯の問題<sup>②</sup>、北朝君主專制と貴族との對立等の重要な問題が存し、これらは必ずしも寒門の究明を手掛とする試みによつては適當に取扱へないと思ふからである。先づ前論文の闕を補ふべく、西晉滅亡後において中原に残留した漢族の運命に就いて略述する。

① 東亞人文學報三卷二號に掲載の豫定。

② これに關して、内田吟風學士に「北朝政局に於ける鮮卑及諸北族系貴族の地位」(東洋史研究一ノ三)がある。

## 二 五胡治下の漢族郡望

永嘉の亂において西晉貴族が死滅・没落・流徙の悲境に淪んだことは、石勒の軍のため覆滅された晉軍の首將東海王越の妃裴氏が奴隸の境涯に落ちたことや、永嘉五年六月、洛陽陷落の時、宗室はじめ、右僕射曹馥以下士民三萬人が殺されたことで一斑が察せられる。この際漢族は郷里の豪族を首領と仰ぎ塙壁に據り匈奴・羯族等の侵暴を防いだが、精銳なる北方の騎兵の爲に壓倒されて殺掠又は捕虜とせられ、逃亡するをえなければ彼等の強制により遷徙を命ぜられた。

遺黎及其征東王彌・龍驤劉曜等、率衆四萬、長驅入洛川。遂出轅轅、周旋梁陳汝潁之間。陷壘壁百餘。……其青州刺史曹嶷攻汝陽關・公丘、陷之。害齊郡太守徐浮、執建威劉宣。齊魯之間、郡縣壘壁、降者四十餘所。

(晉書一〇  
二劉聰載記)

(游)子遠次于雍城。降者十餘萬。進軍安定。氐羌悉下。惟句氏宗黨五千餘家、保于陰密。進攻平之。……徙秦州大姓楊姜諸族二千餘戶于長安。氐羌悉下、並送質任。(同三  
劉曜載記)

後の例は氐羌の豪族に對する場合であるが、漢族についても同様であつた。征服者たる五胡君主は漢族其他の異種族の宗族團隊を脚下に制御するだけの武力と權力とを保持しなければならなくなつた。ことに文化程度高く民族意識の明白な漢人に對しては制御するのみでなくこれと妥協しその知力を利用し國家建設に參與せしめる外はなかつた。西晉の社會は門閥權貴の僭越と陰謀とにより混亂してをり、朝に志を得ざる寒門の士は超越的事物に

心を向け換へるのでなければ、新興の實權者に望みを囑するに至つた。永興元年、劉淵が左國城に自立したとき既に、崔游・左於陸・王宏・范隆・朱紀・崔懿之・陳元達らの漢人官僚が彼に歸してゐた。しかし五胡首禍の後においては祖逖・劉琨・王浚のごとき北州の士望はその累代の聲望を背景として流民難民を傘下に集め、北族の侵略に抵抗して立つに至り、中原回復、尊王攘夷の民族精神が一時振つたことは事實である。一例をあげると、劉遐。字正長。廣平人。性果毅、便弓馬。遭天下亂、遐自爲塲主。攻抄自至、無時不戰。遐每奮擊、直入賊軍。陷堅摧銳。鄉人邵續深知之、以女妻焉。遂立壁河濟之間。胡不敢逼。時人號爲關羽・張飛。(御覽四三五引何法盛晉中興書) 彼等は同民族同階級たる士大夫に對しては極力庇護の態度に出ることにより聲望を高めた。晉書九〇に曰く、陽裕。字士倫。右北平無終人也。士大夫流亡羈絕者、莫不經營收葬、存恤孤遺。士無賢不肖、皆傾身待之。かくの如く中原の治安は殘留豪族の自救自衛の活動により保たれたので、五胡君主は苟くも反抗の態度を執る漢族に對しては武力を以て臨む外なかつたが、彼等にして民族國家に對する意識よりも鄉黨保衛の意識が強く、異民族なりとあくまでには排斥しない限りは、かゝる豪族の社會的地位、即ち魏晉以來の士の身分をそのまゝ承認し、彼等に特權を許し與へ、よつてもつて自らの創業に參與させるに至つた。この事情は特に石勒・石虎の事蹟に顯れてゐる。

重其禁法、不得侮易衣冠華族。號胡爲國人。……勅清定五品。以張賓領選。復續定九品。署張班爲左執法郎、孟卓爲右執法郎。典定士族。副選舉之任。令群寮及州郡、歲各舉秀才・至孝・廉清・賢良・直言・武勇之士各一人。……以牙門將王波爲記室參軍。典定九流。始立秀孝試經之制。(晉書一〇五石勒載記)

下書曰、三歲考績、黜陟幽明。斯則先王之令典、政道之通塞。魏始建九品之制、三年一清定之。雖未盡弘美、



亦摺紳之清律、人倫之明鏡。從爾以來、運用無改。先帝創臨天下、黃紙再定。至於選舉、銓爲首格。自不清定三載于茲。主者其更銓論。務揚清激濁。使九流咸允也。吏部選舉、可依晉氏九班選制。永爲揆法。選舉、經中書門下宣示、三省然後行之。其著此詔書、于令銓衡。不奉行者、御史彈坐以聞。(石季龍載記 同一〇六)

石氏は魏晉の士族を認めたとはいへ選舉方針は人材登用を先とした。これは彼等を輔佐した漢人官僚が夷狄の中に道を實現せんとし、既に儒教の教養を有してゐた北族君主も亦これを是としたからであらう。かつ彼等の當面の課題たる北支における重農主義國家再建の建設的任務を果すためには儒教の政治思想を標榜し、かつ儒教主義の人材を必要としたからである。しかも魏晉の慣行たる九品中正制も既にその士族を認める以上顧慮せざるを得なかつた。五胡末年の南燕慕容超 （五二） 在位 （一二八） について晉書 載記 に

乃下書於境內曰……周漢有貢士之條。魏立九品之選。二者孰愈。亦可詳聞。群下議多不同。乃止。

とあり、選舉の理想と現實との喰ひ違ひが論ぜられたらしい。しかし人材主義への熱意は南朝と違つて眞摯であつた。石虎は先の下書の後、吏部選舉が著徳を度外して勢門童幼、多く吏官と爲るのを怒り、責任者たる郎中令魏奐を免じて庶人となし、豪戚侵恣にして賄賂公行するを患ひ、御史中丞李矩を親任し、中央地方を通じて人事を肅正した。

たゞ士族の社會的地位はこれを保證し戰時にあつても保護の方針に出た。流民や捕虜でも士族たること明かなる者は特別の扱ひをした。

（石勒）進軍攻鉅鹿常山。害二郡守將。陷冀州郡縣堡壁百餘。衆至十餘萬。其衣冠人物、集爲君子營。乃引張賓爲謀主。（晉書 一〇四）

彼が王浚を亡ぼすや、流人を分遣し各々桑梓に還らしめたことを叙した條の晉書斟注には、敦煌石室本晉紀を引  
き

舊族見用者河東裴憲、潁川荀綽、北地傅暢、京兆杜憲、樂安任播、清河崔淵。

とあり、又太平御覽一九引郡國志には

石勒每破一州、必簡別衣冠、號君子城。泊平幽州、擢荀綽等。還襄國。路經此。後俗訛爲箕子城。

又彼は士族を國都襄國の特定區域に聚居させた。

(季龍)徙其臺省文武關東流人秦雍大族九千餘人于襄國。又坑其王公等及五郡屠各五千餘人于洛陽。(同一〇三) 劉曜

季龍引軍、城封丘而旋。徙朝臣掾屬已上士族者三百戶于襄國崇仁里。置公族大夫以領之。勒宮殿及諸門始就、

制法令甚嚴。諱胡尤峻。(晉書一〇 五石勒下)

かくして庶民と共に徙した士族はやがて庶民と區別されて特權的地位を認められた。兵役免除と仕官を許すこととである。

鎮遠王擢表。雍秦二州望族、自東徙已來、遂在戌役之例。旣衣冠華胄、宜蒙優免。從之。自是、皇甫・胡・梁・韋・杜・牛・辛等十有七姓、獨其兵貫。一同舊族。隨才銓敘。思欲分還桑梓者聽之。其非此等、不得爲例。

(同一〇六) 石季龍

(段)遼單馬竄險。遣子乞特眞、送表及名馬。季龍納之。乃遷其戶二萬餘于雍司竟豫四州之地。諸有才行者、皆擢敘之。(同右)

實に士族の仕官を認めるのは彼等の歡心を買ふ最大の方法であつた。故に石氏末年の亂を僞定した漢人冉閔に就

いて曰く、

閔至自蒼亭、行飲至之禮。清定九流、準才授任。儒學後門、多蒙顯進。于時翕然、方之爲魏晉之初。(同<sub>一〇七</sub>右)

五胡君主の強力により、或は彼等の政治的中心に居住せしめ或は本籍に還らしめた流民には漢胡貴賤様々あり、彼等の集る所には新たに縣が置かれた。

流亡士庶多襁負歸之。隗乃立郡以統流人。冀州人爲冀陽郡。豫州人爲成周郡。青州人爲營丘郡。并州人爲唐

國郡。(同<sub>一〇八</sub>慕容廆載記)

於是斬(慕容)仁所置守宰。分徙遼東大姓於棘城。置和陽・武次・西樂三縣而歸。(同<sub>一〇九</sub>慕容皝載記)

郡縣制の施行は中央權力を地方に滲透せしめ、遂に豪族の利益に反する結果を示す。慕容皝が太元二十一年、土族の舊籍を定め、清濁を分辨し戸口を校閲し、軍營封蔭之戸を罷めて悉く郡縣に屬せしめたので士民嗟怨し、始めて離心があつたと云はれる。漢族庶民は北族國家の統治を直接受けるよりも漢族豪族の蔭附たるに甘んじたものであらうが、北魏の場合見受けられる如く、これは國家と豪族との争ひの原因になつた。

前秦の苻堅も太和五年<sup>385</sup>魏晉の士籍を復し役に常聞あらしめたから、五胡諸國を通じ北支の士族階層の顯著な動搖はなかつたと思はれるが、北族國家の建設過程に伴つて漢人士族は官僚貴族としてその行く路を見出す様になつた。直接西晉倒壊に與らなかつた慕容廆は特に漢人士庶を保護集合して東北支那諸燕國の基を定めた。彼は河東の裴嶷、代郡の魯昌、北平の陽耽を謀主となし、北海の逢義、廣平の游逵、北平の西方虔、渤海の封抽、西河の宋爽、河東の裴開を股肱となし、渤海の封奔、平原の宋該、安定の皇甫岌、蘭陵の繆愷は文章才儒を以て任、樞要に居り、會稽の朱左車、太山の胡毋翼、魯國の孔纂は舊德清重を以て引いて賓友となした。最後に平原

の劉讃は儒學該通を以て引いて東庠祭酒となし、その世子皝以下國胄は彼に業を受けた。これらは主に北支東部平野の豪族であるが西方山岳地帯の郡望も亦その地方の北族君主の建國を輔けた。南凉秃髮烏孤は隴右に霸を倡

、以楊軌爲賓客。金石生・時連珍、四夷之豪雋、陰訓・郭俸、西州之德望。楊統・楊貞・衛殷・麴承明・郭黃・郭奮・史嵩・鹿嵩、文武之秀傑。梁昶・韓正・張昶・郭韶、中州之才令。金樹・薛翹・趙振・王忠・趙晁・蘇霸、秦雍之世門。皆內居顯位、外宰郡縣。官方授才、咸得其任。(晉書一二六秃髮烏孤載記)

又、その弟秃髮儁檀に向つて涼州別駕宗敞の進言した語に、

涼土雖弊形勝之地。道由人弘。實在殿下。段懿・孟緯・武威之宿望、辛晁・彭敏、秦隴之冠冕。裴敏・馬輔、中州之令族。張昶、涼國之舊胤、張穆・邊憲・文齊・楊班・梁崧・趙昌、武同飛羽。以大王之神略、撫之以威信、農戰竝修、文教兼設。可以從橫於天下。河右豈足定鼎。

とあり、北族君主の官僚は君主に對し、北支豪族の分布狀態や内情を説明し彼等を一齊に舉用する必要を述べてゐる。此等の豪族が北魏の江北統一後その官界に進入した譯である。

たゞ漢族出身の君主であれば勿論豪族の地位を熟知し尊重し登用に努めた。北燕の馮素弗はかつて求婚して拒絶された韓業を怨みず、舊門を申拔し、侍中陽哲に向ひ秦趙勳臣の子弟を尋ね、忽ち採用したので世人から宰衡の度ありと評された。

君主の豪族尊重の態度は名利に敏き漢人をして民族的反感を消磨して進んで北族朝廷に出仕せしめるに至り、その際魏晉において見られたごとく就職競争の弊風が生じ、矢張門閥權貴の者が優越な地位を占めた。儒教で重

んする服喪は仕官を中絶しその機會を失はせる作用をもつが、漢族奔競の者はこれさへ無視せんとしたため、儒教主義を守らんとする官僚は反對を唱へた。

其尙書郎婁會上疏曰、三年之喪天下之達制。兵荒殺亂遂以一切取士。人心奔競、苟求榮進。至乃身冒縶絰、以赴時役。豈必殉忠於國家、亦昧利於其官也。聖王設教、不以顛沛而虧其道。不以喪亂而變其化。故能杜豪競之門、塞奔波之路。陛下鍾百王之季、廓中興之業。天下漸平、兵革方偃。誠宜蠲蕩瑕穢、率由舊章。吏遭大喪、

聽終三年之禮。則四方知化、人斯服禮。垂不從。(晉書一二三 慕容垂載記)

この場合慕容垂が従はなかつたのは恐らく現實に即した態度に基くであらうが、當時五胡君主は儒學を尙び文學を好み太學の制度も既に劉曜の時に整つた。慕容氏では祖父の殯葬終らざる者は官に取り立てなかつた。晉の升平元年 357 慕容儁の廷尉監常煒は上言して

大燕雖革命創制、至於朝廷銓謨、亦多因循魏晉。唯祖父不殯葬者、獨不聽官身清朝。斯誠王教之首、不刊之式。然禮貴適時、世或損益。……自頃中州喪亂、連兵積年。或遇傾城之敗、覆車之禍。坑師沈卒、往往而然。

孤孫斃子、十室而九。兼三方岳峙、父子異邦。存亡吉凶、杳成天外。或便假一時、或依羸博之制、孝子靡身无補。順孫心喪靡及。雖招魂虛葬以叙罔極之情、又禮无招葬之文。今不此載。若斯之流、抱琳琅而无申、懷英才而不齒。誠可痛也。恐非明揚側陋、務盡時珍之道。……謹案戊辰詔書、蕩清瑕穢、與天下更始。以明惟新之

慶。五六年間尋相違伐。於則天之體、臣竊未安。

これに對する儁の答へに曰く、

煒宿德碩儒、練明刑法。覽其所陳、良足採也。今六合未寧、喪亂未已。又正當搜奇拔異之秋、未可才行兼舉。

且除此條、聽大同更議。

これで見ると戰亂で父母を失ひ他郷に流徙した結果生じた寒門は官界の情實のみでなく、禮法の上からも仕官を沮まれる虞があつたことを知りうる。儒學の再興も北方の政局安定の如何と豪族の利害關係とにより紆餘を免れなかつた。しかし儒教的身分の制限は商工人の進出に對して嚴重であつた。苻堅の時、富商が官爵を受けんとするの漢人士族はこぞつて反對した。

時商人趙掇・丁妃・鄒瓮等、皆家累千金、輿服之盛、擬則王侯。堅之諸公競引之。爲國二卿。黃門侍郎程憲言於堅曰、趙掇等皆商販醜豎、市郭小人。輿馬衣服、僭同王者。宜齊君子、爲藩國列卿。傷風敗俗、有塵盛化。宜肅明典法。使清濁顯分。堅於是推檢引掇等爲國卿者、降其爵。乃下制、非命士已上、不得乘車馬於都城百里之內。金銀錦繡、工商皂隸婦女、不得服之。犯者棄市。<sup>①</sup>（晉書一一三）  
（苻堅載記）

總じて北支では五胡の君主權により士庶區別が明瞭に立てられ、南方におけるが如く貴族間の評價によつて決せられるのみではなかつたから、一流豪族は十目の視る所その士族たる資格を承認され、かつ諸小國分立の形勢は武力を除いては君主權に對する豪族の比重を大ならしめ、北支各地の豪族はその名望や通婚によつて自ら一の體統を有するに至り、異民族の統治を甘んじて受ける反面には漢族の誇りは内攻し、多數の宗族を團結し鄉黨を拊循し、傳統的家風を繼ぎ家庭文化に對する矜持を失はなかつた。しかして寒門と呼ばれる者は南朝ほど多義でなく、概言すれば社會的階層は明瞭なる貴族、明瞭なる寒門、及び農・工・商・奴隸等に區別せられてゐたと思はれる。寒微と小人、即ち庶にまぎらはしき士人と本來の庶民の區別は猶可能であつた。<sup>②</sup>例へば

初慕容熙之敗也、工人李訓竊寶而逃。貨至巨萬。行貨於馬弗勤。弗勤以訓爲才略令。旣而失志之士、書之於

闕下碑。馮素弗言之於跋、請免弗勤官。仍推罪之。跋曰大臣無忠清之節、貨財公行於朝。雖由吾不明所致、弗勤宜肆諸市朝、以正刑憲。但大業草創、舜倫未叙。弗勤拔自寒微、未有君子之志。其特原之。李訓小人、汙辱朝士。可東市考竟。於是上下肅然、請賕路絕。(同二五)

身分限制が貴族社交界の評価ではなく法令によつて嚴重に定められる様を知りうる。

① この政策が魏晉の遺制であることは太原中司隸校尉王宏

の行つたことと比較すれば判る。

太康中代劉毅爲司隸校尉。於是檢察士庶。使車服異制。

庶人不得衣紫絳及綺繡錦纈。帝遣左右微行、觀察風俗。

宏緣此濫遣吏、科檢婦人拍服、至褻發於路。論者以爲慕

年謬妄。(晉書九王宏傳)

② 隋書刑法志に寒庶人の語が見える。それは陳の武帝の制

として、「其二歲刑、有官者贖論。寒庶人准決鞭杖。」と

あり、恐らく、寒人と庶人とを總稱した語であらう。刑

法上の地位で兩者は既に同等になつてゐる。

### 三 北魏朝廷と漢人貴族

北魏の創始者拓跋珪も亦從來の漢族社會の士庶區別を重んじたことは韓顯宗の太和十八年の上表に見える所で、<sup>①</sup>又彼は興起の初めにこそ同宗又は同部族から大人を任命し或は機密を任せたが、帝位に即いて後漸く中原經略の必要上漢族王朝にならつた官制を定め大いに漢族の人材を糾合せんとした。皇始元年、慕容寶を討平した直後のこととして

并州平。初建臺省。置百官。封公侯。將軍刺史太守尙書郎已下悉用文人。帝初開拓中原、留心慰納。諸士大夫詣軍門者、無少長、皆引入賜見、存問周悉、人得自盡。苟有微能、咸蒙叙用。(魏書)

この時叙用された漢人の一例として李先<sup>北史</sup>がゐる。

皇始初、先爲井陘歸。道武問先曰、卿何國人、祖父及身悉歷何官。先曰、臣本趙郡平棘人。大父重、晉平陽太守大將軍右司馬。父懋、石季龍樂安太守左中郎將。臣苻丕左主客郎、慕容永祕書監高密侯。車駕還代、以先爲尙書右中兵郎。再遷博士定州大中正。

こゝに見える回答は任官の際父祖の資狀が條件になつたことを示す適例である。北魏帝室は一面門閥尊重の態度に出ると共に、北支治安再建の必要上、個人的才能をも考慮せざるを得なかつた。

(天賜元年)秋九月帝臨昭陽殿。分置衆職。引朝臣文武親自簡擢、量能叙用。……十一月幸西宮、大選臣寮、令各辯宗黨、保舉才行。諸部子孫失業賜爵者二千餘人。(北史)

しかして北魏朝に仕へるその危険と屈辱とを憚り、仕官しなかつた名望家に對しては隱逸を擧げるとの名目で極力朝廷の権力下に招致せんとした。

(天賜五年二月)己卯。詔使者巡行天下、招延偽彥、搜揚隱逸。(同右)

明元帝もこの方針をつぎ、永興五年(483)二月庚午には、

詔分遣使者、巡求偽逸。其豪門疆族、爲州閭所推者、及有文武才幹、臨疑能決、或有先賢世胄、德行清美、學優義博、可爲人師者。各令詣京師、當隨才叙用、以贊庶政。(同右)

太武帝については神䴥四年(461)九月に

壬申。詔曰、范陽盧玄、博陵崔綽、趙郡李靈、河間邢穎、渤海高允、廣平游雅、太原張偉等、皆賢偽之胄、冠冕州邦。有羽儀之用。易曰、我有好爵、吾與爾縻之。如玄之比、隱跡衡門、不曜名譽者、盡敕州郡、以禮發遣。遂徵玄等。州郡所遣至者數百人、皆差次叙用。(北史)



かくの如き政策の結果、北魏の國力は伸長し江北一統を達成するに至つたが、朝廷に羈縻されその官爵を與へられた漢族名士の間には表面上抵抗できないだけに内心では自己の門閥を誇り互に標榜する氣風が濃厚に生じた。崔浩の如きはその家世々魏晉の公卿なるを恃み、同族の崔模を侮慢したが、一方高允の如く同族の流徙困窮の者を救恤し親しみの念を以て接した人もあり。<sup>②</sup>概して北朝漢族の宗族結合は強固で、北史の列傳目を一見しても分る通り、各州郡には代表的な豪族が少數宛であるが、他の諸族とかけはなれて有力かつ貴顯なる状態を示してゐる。

かくて北魏初葉、漢人にして大官要職となつた者には道武の代に、張兗・崔宏・封懿あり、明元の世に劉潔・盧魯元あり、太武の世に文に崔浩、武に毛脩之あり、刺史にも司州を除き任ぜられる者はあひついで。<sup>③</sup>

就中崔浩はその家世を恃み多くの政敵を作り、遂に非命に斃れる因をなしたといはれるが、<sup>④</sup>漢人官僚の大量進出は多く彼の盡力に俟つものがある。

初崔浩薦冀定相幽并五州士數十人、各起家爲郡守。景穆（恭宗）謂浩曰、先召之人亦州郡選也。在職已久、勤勞未答。今可先補前召、外任郡縣、以新召者、代爲郎吏。又守令宰人、宜使更事者。浩固爭而遣之。<sup>（北史三一）</sup>  
（高允傳）

北魏では郡縣の守宰には概ね豪族を用ひたが、これは勿論その地方の土着豪族で官府と關係なくむしろ反抗的態度に出で庶民を凌虐する者を取締り國家權力を滲透させる爲であつた。この制は末年に弛み守令多く卑賤の者となり士人は反つてこれに任ぜられるのを恥ぢる様になつたが北齊の河清の頃再び舊例に復した。<sup>⑤</sup>

守令は豪族を壓迫威服するに務めたこともあり、<sup>（魏書四）</sup>崔玄伯傳・同李秀林傳）彼等を禮遇優待したこともある。<sup>（同五六）</sup>邢巒傳）これは北人の例であるが興安初相州刺史となつた陸襲の傳（魏書四）に曰く、

爲政清平、抑疆扶弱。州中有德宿老名望重者、以友禮待之、詢之政事、責以方略。如此者十人、號曰十善。又簡取諸縣疆門百餘人、以爲假子。誘接殷勤、賜以衣服。令各歸家。爲耳目於外。於是發奸擿伏、事無不驗。百姓以爲神明。無敢劫盜者。在州七年。

當時北支では官途に就かず従つて青史に名を残すことは稀であるが多數の宗族賓客を擁し郷黨に勢を振つてゐた豪族が多かつたことは金石文の史料などを参考すると一層よく分る。かつて官に仕へた者の子孫であると認められれば士望と呼ばれるが、然らざれば民望と呼ばれた。民の身分の豪族である。恰も南朝で民にも舊門と稱せられる者があつた如くである。<sup>⑦</sup>正史に見える者でも、涼州の大姓賈摹（晉書<sup>六</sup>張茂傳）恒農の宮牛二姓（北史<sup>三三</sup>李仲旋傳）魏末に清河郡の東の曲堤に群盜を率ゐた成公一姓等の例あり、後には官僚化した開封の鄭氏も洩水の戦前には縣をあげて苻堅に就いたことがあり、宣武帝の時に至つても制し難しと稱せられた。（北史<sup>二六</sup>宋世景傳）

かゝる郡望に對して北人出身の地方官には多く酷暴な態度に出た者がある。益州刺史元法僧が州内の人士たる王賈諸姓を卒伍に召し、合境の叛亂を招いたこと（北史<sup>一六</sup>本傳）があるが、これは彼等が士庶區別の觀念に乏しかつた爲で朝廷では道武以來この漢族社會制を認識し存續に同意し、孝文の如きその方針を徹底したのである。

一方漢人豪族の中にも門戸保全と門風矜持の目的で、仕官を輕々しくせず、李孝伯が北人長官に驅使せらるべき功曹を屑しとせず講授を事とし、（北史<sup>三三</sup>本傳）これと反對に宋隱がその子を戒め「功曹以上に進み京官となり門戸の累を爲す勿れ」（同<sup>二六</sup>）と言つたとき消極的態度が見られた。

漢族官僚にとつては後代に顯著になつた様に代人の反感を忍ばねばならなかつたし、地位の保全上帝室と通婚するのが得策であつた。南朝でも外戚の地位にあることは官途上出世が早かつたり名譽なことではあつたが、名

族との通婚は帝室の方も熱心に求めたのに對し、北魏ではむしろ貴族をしてその女子を捧げしめるといふべき傾向があつた。政略結婚は漢人貴族懷柔よりも寒外異民族を控禦することに利用價值が多かつたから、漢族に公主を降嫁することは國初においては漢族が公主に尙するよりも少かつたと思ふ。

太祖曾引玄伯講漢書。至妻敬說漢祖、欲以魯元公主妻匈奴。善之、嗟歎者良久。是以諸公主皆釐降於賓附之國。朝臣子弟、雖名族美彥、不得尙焉。(魏書二四 崔玄伯傳)

この記事は能く這般の事情を告げるものと思ふ。しかし后妃より以下の後宮婦人として名族の女を選ぶことは、彼等を威服する手段として屢々用ひられた。

(靈)太后爲(孝明)帝選納、抑屈人流。時博陵崔孝芬、范陽盧道約、隴西李瓚等女、俱爲世婦。(北史 一三)

かゝる例は、石虎が優僮鄭櫻桃を寵して、將軍郭榮の妹である妻郭氏を殺し、代りに清河崔氏の女櫻桃を納れ、後又これを譖殺した程でなくても、漢族が常に切齒する所の、胡族が漢人婦女に對する高壓的な態度を知るに足る。魏書后妃傳を通覽すると昭成以前には漢族出身らしい配偶者が割合に多いが、道武から太武に至る諸后は何れも代人ならずば慕容・姚・赫連の諸北族の女子であり、文成以後、再び漢族出身が多くなるが、後宮微賤の地位から寵幸せられて皇后した例が多く、五姓の如き名族の女子に見當らない。しかし全期を通觀すれば北支豪族群は相互に婚姻を通ずると共に、帝室とも姻戚關係を有してゐる。

今正史中より元魏と、婚姻の家を求めると、清河崔氏、河内司馬氏、渤海高氏、河東裴氏、東平氏、京兆韋氏、太原王氏、燉煌段氏、弘農楊氏、趙郡李氏、河東柳氏には公主が降嫁してをり、博陵崔氏、清河崔氏、渤海高氏、渤海封氏、京兆韋氏、太原王氏、上谷張氏、滎陽鄭氏、趙郡李氏、范陽盧氏、安定胡氏、長樂馮氏、等は

北魏の外戚になつてゐる。

更に帝室との關係を省き、家族相互の通婚關係を一見する。(數字23は婚姻事例の度數を示す。二〇頁末の附記参照)

氏姓及本貫	來嫁女の生家	生女の出嫁した家	備考(婚姻族の本貫)
韋、京兆杜陵	柳・王・郭・李・楊・裴・王*	杜・薛・柳	*北海
王、太原祁	崔・趙・爰・紇豆陵	盧・段**・和・蘇・郭	*清河 **鮮卑
魏、鉅鹿下曲陽	李・盧・崔*・劉**・李***		*博陵 **彭城・隴西***
邢、河間鄭	李2・		
胡、安定臨涇	梁・盧・崔・皇甫・裴・李・陳		
高、渤海蓆	王*・明・崔**・李・張・賀・拔		*琅邪 **清河
皇甫、安定朝那	夏侯・韋・任・梁		
崔、博陵安平	鄭・宋・李2・高	李・尉遲・魏	
崔、清河東武城	盧・郭*・李・房3・杜・梁・張*	王・陳・盧・柳・趙・梁	*太原 **平原
司馬、河内溫	源・沮渠・陸		
辛、隴西狄道	王	羊*	*太山
薛、河東汾陰	韋		
宋、西河介休	李・劉		
段、武威姑臧	皇甫・董	張*	*燉煌

鄭、滎陽開封	潘・李・石	崔・魏	*長樂
竇、頓丘衛國	司馬		
裴、河東聞喜	夏侯・皇甫・魏・辛	韋	
畢、東平須昌	劉・盧	鄭	*東平
傅、北地靈州	崔・賈・劉*		*彭城
封、渤海蓆	祖・李・司馬・房・盧・劉常	公孫・崔**	*隴西**清河
房、清河東武城	崔*		*清河
楊、弘農華陰	王・韋・鄭		
李、趙郡平棘	邢・翟・崔・盧	崔・宋**	*博陵**廣平
柳、河東解	宇文・蔡	裴	*濟陽
盧、范陽涿	謝・鄭・崔・司馬・王**	劉・魏・李	*高陽**臨淮***中山

本表は不充分的の點を免れないが、相互に通婚してゐる豪族の連鎖を跡づける時は表中の大部分の豪族は北支一流の階層に位し王室とも容易に通婚したことを知りうる。もとより彼等の中に就いていへば優劣自ら存したのであつて、例へば、

元妃盧氏薨後、更納博陵崔顯妹。甚有色寵。欲以爲妃。世宗初以崔氏世號東崔、地寒望劣、難之。久乃聽許。

(魏書二一上  
高陽王雍傳)

また北史七公孫表傳によると、表はかつて友人封愷に向ひ自分の子軌の爲に其の從女を求めたが拒絕された。後

に封氏が司馬國璠の事に坐するや表はその犯罪の證人となり封氏を失脚せしめ、遂に軌は封氏を娶るを得て、一子叡を生み叡は崔浩の姪を娶つた。しかるに軌の弟質は雁門の李氏を娶り一子邃を生んだ。次に曰く、

邃・叡爲從父兄弟、叡才器小優、又封氏之男、崔氏之壻。邃母雁門李氏。地望懸隔。鉅鹿太守祖季眞、多識北方人物。每云、士大夫當須好婚親。二公孫同堂兄弟耳。吉凶會集、便有士庶之異。

この話はいみじくも貴族社會の内情の斷面を照しだしてゐる。燕郡廣陽の公孫氏は先づ二流貴族であるが、公孫表はその才識官位等に依り、一流貴族たる渤海の封愷と友善するを得たが、互に婚姻たるを得なかつた。封氏の政治的失脚が一時その社會的勢望を墜ちしめ、遂に兩家は通婚關係に入り、封氏の壻公孫軌はその外家の地位を好便として一流名家の崔氏の女をその子の爲に迎ふるを得た。しかしこの機會に與らなかつた公孫表の次子質の家は遂に貴族社交界で肩身がせまかつた。貴族間の交際では友、即ち互に人格を尊敬しあふこと、宦、即ち就職をとりなしあひ、同等の地位たるべき資格を相互に承認すること、に比して婚、即ち對等の家柄を認めあひ、素對・舊對として交互に通婚する關係が最も重大であつたことをこの話が示してゐる。

しかれば母の出生の貴賤がその子の社交的地位を限定し、外家の援助がその地位を補強することも亦自然に結果する。<sup>⑨</sup>

廓少孤貧。母賤。由是不爲邦族所齒。初爲里佐。屢逢屈辱。於是感激、逃入山中。遂博覽書籍、多所通涉。山東學者皆宗之。(北史八八 崔(博陵)廓傳)

しかし帝王の權力に依る官途上の榮達、それから結果する富と權力との魅惑が血統至上觀念を動搖せしめずにはおかなかつた。李詡が母賤しき故に諸兄に輕んぜられたが太武帝の一言により帝舅陽平王杜超の女を迎ふるを

得たとき（北史二七）（李訢傳）その例である。

實に當時漢人貴族の關心が婚姻問題に集中されてゐたことは既に著名である。幾多の事例により窺ひうる。崔巨倫の姉が眇目故に下嫁（低い身分の者に嫁す）せしめられんとした時、巨倫の姑趙郡李氏が盛徳ありし亡兄の女をして卑族に屈せしめるに忍びぬとて子の爲に迎娶したこと（北史三二）（崔辯傳）崔俊の一門が皆衣冠の美族に婚嫁し、吉凶儀範の故事が當時に稱せられ、帝室からも憚られてゐたこと（北史二四）（崔懷傳）孝文帝が未だ虜姓を改めない時、步六孤（陸）叙に女を嫁した博陵の崔鑑が「平原王才度惡しからず、但恨むらくはその姓名殊に重複を爲す」と述懐した話に（北史二八）（陸叙傳）よつて知られる。最後の例はけだし孝文帝華化政策の一原因を推測せしめる手掛りになるがこれは北人貴族の實狀を述べる際にふれよう。こゝでは北支州郡を跨いで一枚となつた漢人貴族社交圈を北魏朝廷が無視できなかつたこと、従つて屢々下詔して士民と商工奴隸との間は勿論、同じ士民でも上下の身分内で婚姻すべきを命令してゐる事實を指摘するに止める。しかし、（北史三五）（鄭順傳）（又は北史三五）にある如く

自靈太后預政、姪風稍行。及元叉擅權、公爲姦穢。自此素族名家遂多亂雜。法官不加糾治。婚宦無貶於世。有識咸以歎息矣。義五兄……並恃豪門、多行無禮。鄉黨之內、疾之若讎。

といふ情勢に伴ひ、素性定かならぬ宦官、佞臣、寒人が宮中に勢を振ひ或は政治を左右するに至り、譜系を偽造し出身地を附會するとき現象が生じてきた。

① 北史四〇（魏書六〇）韓麒麟傳、附顯宗。顯宗上書……二

曰……頃來北都富室競以第宅相尚。今因還徙、宜申禁

約。令貴賤有檢。無得踰制、端廣衢路、通利溝洫、使寺

署有別、士庶異居、永垂百世不刊之範。

② 北史三一高允傳、獻文之平青齊、徙其族望於代。時諸士

人流移遠至。率皆飢寒。徙人之中、多允姻婭、皆徒步造

門。允散財竭產以相贍振。慰問周至。無不感其仁厚。又

隨其才能、表奏申用。時議者皆以新附致異。允謂取材任

能、無宜抑屈。

北史四五 張謙傳(清河東武城人)謙性開通、篤於接恤。青齊之士、雖疎族末姻。咸相敬視。李敢李訢等寵妾勢家。亦推懷陳款、無所顧避。

北史四九 毛遐傳。北地三原人也。世爲酋帥。……遐少任俠、有智謀。世爲豪右。貨產巨億。土流貧乏者、多被賑贍。故中書郎檀叢、尙書郎公孫軌等、常依託之。至於自供衣食、粗弊而已。死之日鄉黨赴葬、咸共痛惜。

かくの如く、漢族に限らないが六朝時代の地方豪族が自己の富力と力量と仁愛とにより疎屬鄉黨はもとより一般流民飢人の難を救恤した例は正史に頻見する。王道國家の善政の重要項目たる救恤が必ずしも國家の施設と關係なしに豪族に委ねられてゐた所に又當時の社會狀態を知るべきものがある。

③ 此等の詳細を一覽するには、萬斯同、魏將相大臣年表、同、西魏將相大臣年表、同、東魏將相大臣年表、吳廷燮元魏方鎮年表(何れも開明書店、二十五史補編所收)が便益を與へる。

④ 牟潤孫「崔浩與其政敵」(輔仁學誌十之一・二合期) 靈太后詔、流人所在、皆置令屬郡縣。選豪右爲守令以撫鎮之。(北史一五 高涼王孤傳。又魏書一四元夫穆傳)齊

因魏宰縣多用屬濫。至於士流、恥居百里。文遙以縣令爲字人之切、遂請革選。於是密令搜揚貴游子弟、發敕用之。猶恐其被訴、總官集神武門、令趙郡王勰宣旨、唱名、厚加慰喻。士人爲縣、自此始也。(北齊書五五、元文遙傳)

⑥ 金石萃編一書に就いて見ても多數の例があるが一例をあげると、北魏魯郡太守張猛龍清頌碑(二九)の碑陰に建碑關係者の名を刻し、郡中正爰孝伯、中正顔文遠 魯郡丞功曹史、督魯并新陽主簿 督汝陽并二縣令……魯郡士望……魯縣族望、汝陽縣族望……の順序に列してゐる。郡に繋ける士望は士族、縣以下の族望(民望の語も他に散見す)は恐らく庶に屬するものと思ふ。一般にかゝる碑刻は地方團體の成員の地位の上下を知らしめる點で必要な史料である。

⑦ 「又聽民何例先等一百十家爲舊門、委州檢制。坐免官。尋以白衣兼侍中、出監吳郡太守。」(南齊書三三王僧虔傳)とある場合は民の舊門であるが、「位次崔浩。浩以其中國舊門、雖不博洽、猶涉獵書傳、與共論說之。」(北史二七毛修之傳)とあるのは士族中の舊門を指す。かゝる庶民中の有力者に對し守令の官を板授(假授)する詔は太和二十一年に下され、實授する詔は二十年に下されてゐる。



⑧

支那中世特に六朝家族制の研究には基礎事業として郡望の系圖を作るべきである。現に關係ある所では、周嘉猷に「南北史帝王世系表」及び「南北史世系表」があり、帝室については外の王朝の部分も萬斯同らの諸家により既に出來てゐる。しかし憾むべきは婚姻關係を記載してゐないことで、その價值は半減すると言はざるを得ない。

⑨

顏氏家訓教子に曰く、「有一學士……年登婚宦。」（下略）青年期になると貴族子弟は社交界に出入する様になり、彼をめぐつて結婚と任官とが話題に上る。所が出身がきびしく吟味されなければならぬ。ついで曰く、「江左不諱庶孽。喪室之後、多以妾媵終家事。……河北鄙於側出。不預人流。是以必須重娶、至於三四。母年有少於子者、後母之弟與前婦之兄、衣服飲食、爰及婚宦、至於士庶貴賤之隔、俗以爲常。」（同書後娶）

⑩

（和平）四年十二月。辛丑詔、以喪葬嫁娶、大禮未備、命有司爲之條格。使貴賤有章、上下咸序、著之于令。壬寅詔曰、婚姻者人道之始。比者以來貴族之門、多不率法。或貪利賂賂、或因緣私好、在於苟合、無所擇選。塵穢清化、虧損人倫。將何以宣示典謨、垂之來裔。令制皇族肺腑王公侯伯、及士庶之家、不得與百工伎巧卑姓爲婚。犯

者加罪。

（太和二年）五月詔曰廼者人漸奢尙、婚葬越軌。又皇族貴戚及士庶之家、不惟氏族高下、與非類婚偶。先帝親發明詔、爲之科禁。而百姓習常、仍不肅改。朕念憲章舊典。永爲定準、犯者以違制論。

（太和七年十二月）癸丑詔曰、夏殷不嫌一族之婚、周世始絕同姓之娶。斯皆敦睦時設、政因事改者也。皇運初基、日不暇給。古風遺轍、未遑釐改。自今悉禁絕之。有犯者以不道論。

（太和十七年）九月。又詔闕養戶不得與庶子婚。有文武之才、積勞應進者、用庶族例聽之。

以上は北史帝紀より婚姻關係の詔勅を列示したが、士庶良賤同姓の不婚を嚴命するなど何れも漢文化と同調を企圖したものである。

〔附記〕 一五—一六頁の表について、

資料は主として北史に據る。南朝關係及び帝室との通婚、正妻ならざる配偶關係は省いた。本貫を註記せざる姓は上段に見えてゐるものでなければ未詳のもの。通婚の一例につき婚姻兩族の相當個所に二度示さるべきであるが、一方に止めた場合が多い。